
UNKNOWN BLADE

響 航流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNKNOWN BLADE

【Nコード】

N2758Z

【作者名】

響 航流

【あらすじ】

これは主人公が目指すもの、それぞれの人間が目指すものを描いた物語です。

ここには剣も、魔法も妖精もドラゴンもない。
そこにあるのは決められた運命と超能力だけだ。
たどり着く場所は違ってもやることは同じ。
これは愛と革命の物語です。

狂う前の物語（前書き）

稚拙な文章ですががんばります！

狂う前の物語

ピピピピピピピピ……

朝。

目覚まし時計の不快な音に目が覚めた。

カーテンの隙間から朝特有の眩しい太陽光が注がれる。

(眩しい……)

そんな当たり前の事を思いつつ、ベッドからはい出る。

学生にとって学校の平常授業なんて苦痛でしかない。もちろん俺の学校も今日は普通の授業だ。

立ち込める憂鬱感をなぎ払い、適当に着替えを済ますと、1階に降りる。

リビングの椅子に座ると、朝食を作る母親の背中が「おはよう」と使い古された挨拶。

その言葉を聞くと、『ああ、今日も昨日と同じ日常なんだな……』

『と、そう思う。』

朝食をモムモムとほおばる間に自己紹介でもしよう。

俺の名前は水城^{みずしろ} 御鷹^{みたか}。

高校3年生。

趣味は特にナシ。

特技も特にナシ。

さっきまでの光景を見てわかると思うが、ただの一般人である。今までも変わった経歴はナシ。

強いて言うなら、俺には父親がいない。

そして不登校の弟がいる。

ただそれだけ。

十分変わっている気もするが、それらが俺自身に何か影響を及ぼすことはない。

ああ。

あと、隣の家^に幼馴染の女がいる。

お互い部屋がすぐ真ん前にあるため、時々ソイツが俺の部屋にやってくる（窓から）。

『それだけで十分お前は特別なやつだ。フラグ立てまくりじゃねえか』と友人Aに言われたこともあるが、それに慣れている俺自身にはその特別さは理解できない。

すでに俺に『イラッ』とか思った人もいるかもしれないが。我慢してください。

朝食を済ませ家を出る。

普通だ。ここまでは。

家から学校までは、徒歩3時間

殺す気か。

もちろんバス通学だ。

バス停までは徒歩5分程度なのでわざわざ自転車は使わない。

俺は、『普通』という言葉が嫌いだ。

高校生にもなつてまだ非現実^に巻き込まれるという夢を見ている、というわけじゃない。

とにかく、新しい環境が欲しい。

自分の退屈な人生を変えてくれる――、環境が。

要するに退屈が嫌いなわけだ。

どんな人間だってそう思うはずだ。きっと。

一般的人間の俺が言ってるんだからそうに違いない。

徒歩5分。駅に到着した。

そこにはうちの学校の制服を着た奴がいた。

それこそが先ほど話した、『幼馴染』というやつなのだ。

彼女の名前は榊^{さかき}雛姫^{ひなぎ}

「おっ、みーくん！元氣してたかな？ちなみに私は元氣してなか

ったよ」

嘘つけ！バリバリ元気だろ！

「元気してたかって・・・、昨日会っただろ。みーくんはやめろ」

「そーだったそーだった！えへへ」

このテンションに毎朝付き合わされてるわけだ。

これから始まる“普通”の学園生活に対する憂鬱感もすこしは晴れる。

「もー！遅いよー。バスいつこ行っちゃったじゃん！」

俺はこの言葉に、

「先に行けばよかったのに・・・」

なんてイジワルを投げかける。

この言葉を今まで何度コイツに言ってきたことか。

こういうとき、こいつは決まってこう言うんだ。

「だって、つまんないじゃん」

と。

多分バスの中で話し相手がいなくなる、と言いたいのだろう。

その気持ちはわかる。

それこそ、“退屈”だ。

「・・・・・・・・あ。ホラ。バス来たぜ。行こう」

「うん・・・」

そうして俺たちはバスへ乗り込む。

バスは“変わらない日常”へ向けて、走り出した。

到着。

ちなみにバスの中はほとんど無言だった。

雛姫ひなぎも弟が不登校であることは知っているが、深くは聞こうとしない。

気を使っているのだろう。

今のアイツはそもそも部屋から出てこない。

ここ数ヶ月顔も見えない気がする。

「学校ってどう思う？」

唐突にそんな事を聞かれる。

「どうって・・・どうだよ・・・」

「いや、楽しいーとかめんどくさいーとかさー」

漠然としてるなあ・・・

「んー・・・。楽しい。・・・楽しい、し、めんどくさい。かな
？」

「それさつき私が言ったやつじゃん・・・」

「いやそうだけどさ、それ以外になんかあるか？」

「『愉快だ』！」

「『楽しい』の言い方変えたただけだろ」

いつも通りの適当な会話。深そうで深くない、普通の会話だ。
時間にはまだ余裕がある。

校舎に入ろうとしたそのとき。

何か、とてつもない違和感を感じ、立ち止まる。

そこには一人の女の子がいた。

制服のデザインが少し違うので、おそらく中等部の子だ。

髪型は・・・ツインテール？・・・ちよつと違うな。

どちらかと言うとおさげに近い気がする。

今の時代にしては珍しいとは思うが、それ自体は大して気に留め
ない。

しかし、

その子は、髪の毛が金色だったのだ。

（金髪って本当にいたんだな・・・）

なんて率直な感想しか思い浮かばなかったが。

「どしたの、みーくん？」

「・・・いや。なんでもない。みーくんはやめろ」

そして俺たちは教室へと向かった。

教室ではすでに来ていた早寝早起きの生徒たちがざわざわと話していた。

いつもこんな感じだが、今日はいつもに増して騒然としている。
「おい水城ー！昨日のアレ、一体なんだったんだろうな！？」

俺が自分の机にバッグをかけた瞬間に、友人が話しかけてきた。
こいつは秋瀬^{あきせ}燦汰^{さんた}。

12月後半に大活躍してそうだがクリスマスの予定はナシ、とのことだ。

「アレ……？……ごめん、思い当たる節がない」

「ハア？昨日の“音”だよ！ホラ！夜中にすっげー爆音みたいな
のしたじゃん！！」

「……？」

首をかしげる。一切思い当たらない。

「まさかお前……あの音で目が覚めなかったのか……
？」

「まあ、多分そうだろうな」

秋瀬は2秒ほど口をあんぐりと開けていた。

「どんだけ深い眠りについてたんだよ……」

「さあな……で、その爆音つてのは？なにがあつたんだ？」

そう投げかけると、自信満々の笑みでこつちを睨んだ。

「ほんとはまあ、警察くらいしか知らないんだけどよ……なんと！新聞部部長であるこの俺が情報入手してしまいました！！！」

「お前新聞部だったんだ……」

「今更っ！？」

「まあいいけど。で、その情報つてのは？」

秋瀬はその後「僕らの友情を切り裂く一言をサラッと流された・
」とかぼやいてたが、気にしない気にしない。

「いいか……？聞いて驚け！なんと！この続きはCMの後we
bで！！！」

いらつ。

「いいから話せよ友達やめるぞ」

「ゴメンナサイ」

すぐ折れたな．．．。

「なんと……爆発事件が起きたらしいんだ!!」

「ま、あ、爆音だからな。」

「まあ最後まで聞けつて。それがまあ、同時に12ヶ所!!うちの町だけでだぜ!?考えられるかよ!」

「そりゃあ……たしかにすごいな……」

「で、犯人もまだ見つかってないってさ」

「おいおい大丈夫かこの町……」

「さあな」

キンコーンカーンコーン……

チャイムが鳴る。

「おう、お前ら席に付けーホー、ムルーム始めるぞー」

「……つと、じゃな！」

慌てて席に歸る秋瀬。

俺も自分の席に座る。

「えゝ．．、先生一同で話し合った結果、事件のほとぼりが冷めるまで、学校は休校になりました」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

すげえ
・
・
・
。

こんな風に長期休暇がもらえるなんて、小学校のとき以来初めてだ・・・。

小学校の時は一度インフルエンザで休校になったが、俺自身がインフルエンザでちっとも休んだ気にならなかったからな……。

まあこれくらいの事件が起きたんだ。この対処が妥当だ。

クラスのみんなも不謹慎に笑ったりしなかった。

俺たちももう高校3年生だ。

それぐらいの落ち着きはある。

「で、えゝ．．．、犯人が捕まる、もしくは、事件がしばらく起
こらなかつたら、また学校再開だからなー。お前らももう受験生だ。
決して気は抜かないようになー」

俺は窓の外を眺める。

．．．。

まあ、これくらいの刺激はあってもいいよな．．．？

こんな事めつたに起こらないぜ。

なにせこの世界は平和すぎる。

たまにはこんなスリルがあってもいいと思う。

ま、どちらにせよ俺たちの人生なんてずっと普通の――。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ン．．．．．！！！！！！

．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．？

一瞬、本当になにが起こったかわからなかった。

人間の脳の処理能力はすごいものだ。

たかが0．5秒ほどで、理解できた。

窓の外、少し離れた中等部校舎で

大爆発が起きていた。

きつとこの日から何もかもが狂っていったんだ。

俺たちの日常も、この世界も。

分かる。

次に爆破されたのは 1 - B、2 - B、3 - B だ。

「……っ！生徒全員外へ避難しろ！！」

教師が叫ぶ。

この状況で全員冷静に逃げられない。

生徒たちは我よ我よと廊下へ走る。

俺は他の生徒たちに押されてなかなか外にでられない。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオン!!!!

やばいッ！次はC組だ！！

爆風に廊下に出ていた生徒たちは押し倒される。

このままじゃ全員逃げ切れない・・・！？

人の群れは立ち上がり、階段へと走る。

各クラスの爆破には3分近く空きがあった。

クラスメイトたちは大体出ていき、ようやく俺も教室外へでられ
そっだ。

しかしこのまま逃げるとD組爆破の巻き添えになるので、ここは冷静にD組爆破を待つ。

クラスには数人しか残っていない。

この数人は賢いのか、むやみに室外へ出ようとする者はいない。

その
“ 数人 ”
のなかには、幼馴染の雛姫もいた。

しかし雛姫だけは様子がおかしい。

地面にペタンと座り込んでいる。

「……どうした!？」

「う……うう……、足……くじいたかも……」

思考回路が一瞬吹っ飛ぶ。

じゃあどうやってここから逃げる。

置いていくか？

見捨てるか？

無視するか？

・・・どうしても、『おぶって一緒に逃げる』という選択肢が出てこない。

人間って・・・弱い生き物だな・・・。

「ヒナっ！大丈夫!？」

雛姫の親友の月島つきしま夜見よみが雛姫のもとへ駆け寄る。

「え・・・あはは・・・、足くじいちゃった・・・。」

「あはは・・・って・・・。」

月島も動揺していた。

多分、月島も見捨てる選択肢しかないだろう・・・。

俺と同じ、ふつうの人間なんだから。

「・・・わかった！わたしの背中につかまって・・・!」

・・・は？

何言ってるんだよこいつ・・・。

「だめだよ・・・夜見ちゃん・・・が逃げ遅れちゃう・・・!」

!

「大丈夫だよ！なんとかなるって・・・!!」

「ならないよ!」

そんな会話を聞いてたら。

なんか俺ってみつともないな・・・。

と、そう思えてきた。

自分の事ばかり考えて、他人を引きずり下ろしてでも自分だけ助かるうなんて・・・。

人間としてはそれで普通なんだろうけど。

俺も一度くらい、子供の頃憧れてた“ヒーロー”ってやつに、なってみたかった。

「雛姫・・・!俺の背中に乗れ!!」

言
っ
て
や
っ
た
！

言っ
て
や
っ
た
ぞ
チ
ク
シ
ョ
ー
！
！
！

「でも……」

「でも……じゃねえ！ こちとら男だぜ！！ 男の体力舐めんなって！！」

「いや……でも……」

「いいから乗れ！！」

雛姫はキョトンとしていたが、少し安心した表情に変わった。

「うん」

「よっし！」

雛姫は俺の背中にしっかりと捕まる。

その瞬間、

**ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオン!!!!!!!!!!**

D組が爆破された。

タイムリミットはあと3分。

下手をすれば廊下にまで被害が及ぶだろう。

1階まで逃げ切れれば窓から逃げられる。

だから、3分以内に1階まで逃げ切れって話だ。

「……ッ！ やってやるぜチクショー！！！」

そうやって俺達は教室から飛び出した。

少年はヒーローになる（後書き）

いまだにSFっぽさが出ていませんが、しばらくすると出てくると思います。

踏み入れた少年

俺は雛姫を背に乗せ、廊下へ飛び出る。

案の定、3階は全体的に火の海だ。

クソッ！ 時代遅れの木造校舎め！！ なにが『おもむき趣ある校風』だよ！ 恨むぜ理事長！

転ばないように慎重かつスピーディーに階段をかけ降りる。

途中でコケそうになったが、なんとか持ち直した。

「……………っ!？」

3階と2階の踊り場を曲がると、熱で顔が溶けそうになる。

「チイツ……………、ここも火の海かよ……………」

2階には火の手が上がっていた。

「みーくん……………。大丈夫……………?」

心配そうな目で見つめる雛姫。

「どーすんだよ……………コレ……………。そしてみーくんはやめろ……………!」

「下がってて!!!」

俺が立ち止まっていると、後ろからの月島の声。思わず振り向く。月島はどこからか消火器を持ってきていた。

「ナイスだぜ月島!!!」

「ご褒美は弾んでくれよっ!!!」

そう言つと月島は炎の壁に突っ込み、一気に消火。こついつときの手際はとてもいい。

「ほらっ、急げ！時間がない!」

「あ、ああ……………」

一気に2階へ降りる。

階段のコーナーを曲がったときに、違和感。

「月島……………これは、マズイかもしれない」

消火器を投げ捨てた月島は、なんで?、と問う。

「俺の気のせいじゃなければよ．．．階段まで燃えてるんだ．．．

．．．」

「え．．．．．？」

「残り時間は！？」

月島はポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認した。

「．．．．．つて、時刻確認しても意味ないし！！」

こんな時にボケられても困る。

「ん．．．．．あと2分くらいだと．．．．．」

「くっ．．．．．」

これは本当にまずい。

消火器ももうないだろう。

何か火を消せるもの。何か火を消せるもの．．．．．。

うん。

無いな。

諦めるのは嫌だが、もう打つ手がない。

階段へ逃げようにも、3階からも火で上にも下にも行けない。

このままだとE組爆破に巻き込まれるだけだ．．．。

どうするよ俺。

困った俺は月島の方を見る。

俺って、本当に弱いんだな．．．。

月島は下唇を噛み締めてうつむいていた。

「夜見ちゃん．．．？」

月島は深く何かを考えるようにして、そして何かを決心したかのように顔を上げる。

「二人とも．．．目．．．閉じてて．．．」

「．．．．．？」

なにが起こるかはわからないが目を閉じる。

目を閉じると、温度だけが伝わってきてさらなる恐怖だ。

俺は恐怖心に耐え切れず、うつすらと目を開ける。

そこに信じられない物、触れてはいけない物があるとも知らず、目を開けた。

月島の左の手のひらには、魔方陣に似た光が集まっていた。
薄く光る陣に、月島は右手を入れる。

入れた先には月島の手はない。あの陣はどこへ繋がってるんだ？
月島が右手を引き抜くと、そこには消火器が握られていた。

(なん・・・なんだよコレ・・・どうなってんだ・・・？)

月島は同じ動作を何度か繰り返す。

そして消化器を5本ほど取り出すと、こちらを向いた。
とつさに目を閉じる俺。

「目・・・開けていいよ」

もう一度目を開く。

夢じゃない。

たしかにそこには消化器が5本、転がっていた。

「これ・・・どうやって・・・？」

「そんなことどうでもいいだろ？」

そう言いながら月島は淡々と消火作業をする。

どうでもいいって・・・、かなり良くない気がするが。

「まあとりあえず道は開けたから、はやく逃げよう」

月島はそう言い、走り去った。

「・・・・・・・・・・。俺も急ごう・・・」

無事校舎から出られた。

「ゼエ・・・はあ・・・ごほっげほっ・・・！死ぬかと思
った・・・！」

実際死にかけてたしな。

「君たち・・・大丈夫かい・・・！？」

消防の人が話しかけてくる。

これが大丈夫に見えるのかよ・・・。

「だいっ・・・じょーぶで・・・す・・・」

それでも正直には言えない俺だった。

「それでもよ．．．E組は爆破されないな．．．．．」
「そーだね．．．．．」

もう脱出してから5分近く経っている。
なぜ、爆破されなかったのだろうか．．．？

しばらくすると、校長が自宅退避を言い渡した。

みんな複雑な表情で帰路につく。

中には避難しきれなかったA組の全員とB組、C組の数名の名前を叫ぶ者もいた。

「．．．雛姫。俺たちも帰るか．．．．．」

「．．．．．うん」

徒歩で駅へ向かう。

歩く先には、なぜか月島がこっちを向いていた。

人ごみにまぎれていたせいか、雛姫はその姿に気づかない。

歩を進めるうちに月島とすれ違う。

特に何も言わずにすれ違おうとした。

だが、月島はそうでもないらしい。

——二人きりで話したい事がある。——

そう、俺の耳元で囁いた。

咄嗟に振り向く。そこには歩き去っていく月島の姿が見えた。

「．．．．．っ！ すまん．．．先に一人で帰っててくれ．．．．

！！

「うえ！？．．．どして．．．．．？」

「忘れ物をしたっばい！！」

そんな適当な言い訳でごまかすと、俺は月島のを追った。
少なくとも愛の告白でないことはたしかに分かっていた。

それがいい話じゃないことだって、きつとわかってたはずだ。

それでも俺は追いかけた。

きつとその先に俺の求めていた非日常が訪れるのではないかと、

期待してたから。

迂闊にも――、踏み入れてしまったのだ。

踏み入れた少年（後書き）

やっと超能力っぽい場面を見せられました。
なんか楽しくなってきた・・・！

その少女、七瀬 愛理

「・・・見たでしょ」

俺は月島について行き、小さい路地に着くなりそう聞かれた。

「見・・・た・・・、って？・・・何を？」

なんとなく予想はついたが、全力でシラを切ります。

ハイ。

なんか、本当に惨めだな俺・・・。

「水城だつて、大体予想はついてるんだろー？ 私がなんのこと話してるか、さ」

「・・・いや、さっぱり」

意地でもシラを切る。切って切って切りとおしてやる。

「チツ・・・。話にならん・・・。」

イジけた風に舌打ちすると、月島は後ろを向いた。

「・・・なあ、なんなんだよ一体。その“見た”ってのは・・・」
シラを切りながらあわよくば聞き出してやろう、という魂胆である。

しかしその質問をすると睨まれた。

月島は小さくため息。

そしてまた睨む。

ダンッ！！！！

「・・・つつ・・・。」

月島は、俺のネクタイを鷲掴みにして俺の背中を壁に押し当てるように顔を近づける。

「じゃあ質問を変える。水城は私が“目を開けるな”と言ったとき、目を開けたか？」

「・・・。」

その質問は卑怯だろ・・・。

雛姫は呼ばれず、俺は呼ばれた。

つまりこいつには、バレてる。

さすがに逃げ切れんか……。

「…………ごめん。開け——」

「それ以上の暴行はやめてください」

突然知らない女の子が割り込んできた。

しかしこの子、どこかで見たことが……。

いや、深く印象に残ってる。

「水城^{みずしろ}——、この子友達？」

「いや、知らない子だけど…………」

「ふむ…………」

乱入したその子は、ネクタイをつかんだ月島の腕をしつかりと掴んでいる。

おまけに、金髪である。

今朝見た子だ。

「それ以上の一般人への暴力は、光星学園中等部風紀委員長であるこの私が許しません」

「中等部……ねえ。どーりで身長が低いわけで…………」

「平和秩序を乱す者に年齢も身長も関係ないです。それにあなただつて、大して変わらないじゃないですか」

皮肉った月島の言葉を軽くあしらうその子は、とてもかつこよかつた。

「まあそうだけど…………。悪いけど私はこのお兄さんにちょっと用があるだけなんだよー」

「私にはただの尋問にしか見えませんが…………？」

「よかったね。拷問じゃなくて」

「茶化さないでください」

ここまで来ると、さすがに月島も少し困った表情。

それでも俺のネクタイは離そうとはしないのな…………。

「とにかく、それ以上の暴力行為は許しませんからね・・・」
その子は1度まばたきをすると、月島をしっかりと見て、続ける。

「SHIFT、1超能力者、月島 夜見さん」

その一言、月島の全身に悪感^{おかん}が走る。

ネクタイをキツく締めていた腕が、するりと解け落ちる。

「ははは・・・、参ったな・・・。。・・・君、何者？」

月島の手を離れたその子は、指を口元に添え、考えるような仕草をし、答える。

「光星学園中等部風紀委員、七瀬^{ななせ} 愛理^{あいり}と申します」

その子はさっきまでとは裏腹に可愛らしく、そう言った。

その少女、七瀬 愛理（後書き）

とうとうパツキン登場です。

でも実際日本に金髪の中学生なんているんですかね？
そもそも中学に風紀委員なんてありましたっけ？

始まり

「——つ。超能力者つてのは正解。でもさ、SHIFT
1つてなんのこと？」

「それにはお答えしかねます」

「.....」

超能力者.....

まさかそんな.....

心の整理がうまくできない。

そんなもの信じられるかよ。

でも俺は実際見ている。

でもあれは、どちらかと言うと魔法に近かった気もする。

にらみ合う月島と七瀬さん。

「なあ、超能力つて一体なんなんだよ.....」

俺はその質問を月島にしたのか、それとも七瀬さんにしたのかはわからない。

質問に答えたのは七瀬さんだった。

「さっきの会話を聞く限り、あなたも当事者の一人でしょう。中途半端に知って言いふらされるのも面倒ですので、その質問にはお答えします」

前置きが長いな。

「超能力とは——、そのままの意味です」
.....

前置きの割に本文は短いな。

「そーじゃなくって、もつと、こう、なんというか.....」

「言いたいことは分かります。しかし私たちだってよくわからないんです」

と、七瀬さんが言う。

「その割にはなんか色々知ってそうな事言ってたけどなー」

と、月島が皮肉たっぷり返す。

「少なくともあなたよりは知ってます。よく知りもせずこんな例^{レギュラー}外項目を扱うわけにもいきませんので」

なんだよこの皮肉合戦。

「まあ、こんなところであなたと言い争っている暇はありません」

「私たちが暇人だつて言いたいのか？」

「『私たちが』って・・・、俺も入ってんのかよ・・・」

「いえ、私には今回の件についての調査がありますので」

今回の件・・・？

学校爆破の件か。

「この事件について、現在警察が調査を進めています。しかしどうもおかしな点があるんですよ」

「おかしな点・・・、とは？」

「爆発物が、見つかってないんですよ。どの教室でも。もちろん、爆破される予定だったE組でも」

・・・？

「つまり、それが超能力者の仕業ってわけ？」

「ご明察です。あなた方にはそれに協力していただきたい。」

はあ・・・？

「『あなた方』って・・・、俺も入ってんのかよ・・・」

「当然です。あなただって、関係者でしょう？ 相手は超能力者です。ので、あまり無茶な協力はさせません」

「なあ、その、『あなた』っていう呼び方をやめてくれないか？」

七瀬さん」

そう頼むと、七瀬さんは透き通った瞳で俺の顔をじっとみつめる。

「それでは、水城御鷹さん。それと、年上に『さん』を付けられると気持ち悪いので呼び捨てでいいです」

フルネームかよ・・・。

てか、気持ち悪いって・・・。

気にはなつたがそれ以上はあえて何も言わなかった。

「・・・で？協力って？俺は一体何すれば？」

「それは――。まずいですね。今すぐここから離れましよう」

「は……？　なんで？」

「あと40秒です」

意味のわからない事を言っと、七瀬は俺の手を引き走り出す。後ろから月島もついてきた。

そのまま走り続け、無事に路地を抜け出した。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン!!!!!!!!

また爆発。

目の前の町工場からだ。

先ほどいた路地は崩れさった。

.....

なんで七瀬は、こんなことが分かるんだ……？

そう訊きたかったが、怖くて訊けなかった。

「分かりますよね？この町は危ない。これ以上被害を拡大しないためにも、一早い解決が必要なのです」

握っていた俺の手を話すと、七瀬は俺と月島に、もう一度言った。

「この町の秩序のために、ご協力お願いいたしたい」

俺も、月島も、黙って首を縦に振った。

今日の災難、明日の寢床

翌日。

「えー……。というわけで、ただいまより第一回犯人だーれだ議論大会始めたいと思いまーす。はい拍手ー」

パチパチパチ。

七瀬はご丁寧小さく拍手をした。月島は言うまでもなくノーアクション。

空気は読まないタイプなんだろう。

「月島、拍手」

「しない！」

「ノリ悪いなー……」

キツと睨む月島。

これ以上言々と俺の顔を挟んで拍手されそうなので、よしとおこ

う。
「ああ、拍手なんて別にいくらやってあげてもいいんだよ？でもね……」

「もったいぶるなよ。言いたいことは言っていていいぞ」

「じゃあ言わせてもらう。なんでこの会議私ん家で始まったの

！？」

……………。

……………。

……………。

…………。

七瀬と俺は沈黙し、月島の顔を眺める。

「俺だつて別にここでやりたかった訳じゃない」

「私がお願いしたんですよ」

七瀬はそう切り出した。

「男性の家に上がるのはどうかと……。私も風紀委員ですので

「一応」

「ぬ……。じゃあナナセさんのお宅でやればよかったじゃないですかよー……」

なんか変な口調になってる。

「あなた方を家に入れると危険な気がしたので」

「あなた方って……。俺も入ってんのかよ」

「それはどういう意味だよー。荒らしたりしないよ？」

———そうですか。なら、今後は検討します。———

七瀬はそう言つと、携帯電話を取り出してカチャカチャとつつく。会話の途中でも平気で携帯、というのはやはり七瀬も現代人なんだな……。と悟る。

携帯電話を持ってきたバッグにしまうと、急に立ち上がった。そして挙動不審にあたりを見回す。

「どうしたの？」

月島が尋ねると。

「家宅搜索です」

七瀬がスパツと答えた。

「なんで！？されるのは嫌だつて言つたクセにするのはいいの！？」

「まずは味方の潔白を証明しないと捜査は進みませんよ」

「そのセリフ、ワクワクしながら言う言葉だっけ！？」

七瀬はとても楽しそうな顔で部屋をキョロキョロと見た。

その後もどつたんばつたんと楽しそうにはしゃいでいたが、そろそろ止めないと危ない。

「お前ら落ち着けよ……。家の方に迷惑かかるだろ……。」

「……。？そう言えば、この家には私たち以外の人の気配がしませんか」

「お前気配とか読めんの！？かけー！」

「言葉の綾あやですよ」

俺たちは俺たちで騒いでいるが、月島1人ボーっと座っていた。

まるで別の考え事をしてるみたいに。

「・・・どうした月島？」

「うえ？ああ・・・いや、なんでも」

「・・・？」

そう言い、手を横に振る月島の顔は今にも泣きそうだった。

その理由なんて俺には分からない。

しかしここで理由を訊くのは野暮ってもんだ。

さらっと流すのが粹ってもんだろう。

「で、そう言って手を横に振る月島先輩はなんでそんなに今にも泣きそうな顔をしているんですか？」

野暮な奴はここにいた。

「オイ・・・、七――」

七瀬の無礼を咎めようと発した言葉はすぐに遮られた。

「私、いないんだよ・・・、両親」

月島はうつむいて、そう答えた。切ない顔で。

俺は七瀬の方を、半分睨むように、見る。

その顔は『無』だった。

特に何も思ってないような、そんな顔。

「私には弟も居るんだけど・・・、病気で、ずっと病院」
小さな声でそう言った。

「そうか・・・。」

どうすんだよこの空気・・・。

『犯人だーれだ』とか言うような空気じゃない。
シリアスなんだよ。

俺の家にも父親はいないけど、母親と弟がいる。

死んでないどころか弟に至ってはずっと部屋の中にいる。
だから寂しくない。きっと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰も喋らない。

帰りたい・・・・・・・・。

本当にどうすんだよこの空気・・・。

ここで『元気に仕切り直そう!!』とか言う奴がいたらそいつは間違いなく空気が読めない。

「そうですか。それは気の毒ですね。それでは、元気に仕切り直しましょう」

空気が読めない奴は、ここにいた。
予想通りの七瀬愛理である。

だがこれ以上空気が悪くなるのも困るので、便乗しておこう。

「そうだな。でも、犯人を見つける手掛かりなんてあるのか?」

「ありません。あるんならとくに私一人でやってます」

「じゃあどうやって探すんだよー」

月島もようやく喋った。元気で何よりだ。

「わかりません。なので今日はお開きです」

「なんで集まったんだよ!?!」

まあ、もう夕方なので仕方ない。

そろそろ帰らないと母さんが仕事から帰ってくる時間だ。

「それでは各自、犯人を探す方法を考えておいてください」

「お前結構無茶な性格だなー・・・」

「はい」

というわけで。

というか、どういうわけか本日はお開きとなった。

「おじゃましましたー」

「おじゃましました」

俺と、それから空気を読まない野暮な七瀬は月島（の家）に挨拶をすると、玄関を出た。

特に交わす言葉もなく5歩ほど歩く。

「あ、水城御鷹先輩。ちよつとここで待っててください」

「フルネームはやめてくれ」

そんな俺の切実な願いも聞き入れず、七瀬は月島の家に戻る。

忘れ物か・・・？

しかし、七瀬は玄関に入ると、扉がゆっくりと閉まった瞬間に出きた。

「お待たせしました」

「忘れ物か？」

「いいえ、ちよつとしたイタズラを・・・」

意味ありげに微笑む。その“ちよつと”がどれくらいのものなのか。

うむ。こいつのやりたいことはさっぱり分からん。

「まあいいです。帰りましょう」

そう言い七瀬は俺の腕を引っ張る。

「帰りましょうって、お前ん家こつちなのか？」

七瀬は黙り込む。

急に俺の腕から手を離すと、俺の方を真正面から見て、言った。

「違いますよ。護衛です。いつ爆破が起こるか分からないんですよ？」

そして、くるつと方向転換。俺の家がある方に向き、勝手に歩き始める。

「まあ、もう手遅れかも知れませんがね・・・？」

「お前が言うつと冗談に聞こえねー・・・」

本当に呆れたものだ。

俺は歩く七瀬の背中を追った。

冗談じゃない。

本当に、冗談じゃない。

俺はもっと用心しておくべきだったんだろうか。

いや、用心してどうにかなる問題でもなかった気がする。

俺は頭の中がぐちゃぐちゃに掻き回されるような感覚に陥る。

これを現実だと認識してしまうと何もかもが潰れてしまいそうで

「あーあ。これは派手にやっちゃいましたねー・・・」

隣の七瀬がまたも空気を読まずに喋りかける。

空気が読めないとか以前に、不謹慎が過ぎる。

現状を簡単に説明しよう。

俺の家が、燃えていた。

窓という窓からは黒い煙が空へと放たれ、距離を置いても顔がとても熱い。

「なん・・・で・・・・・・？」

誰に投げかけたのかも分からない質問に、七瀬は答える。

「爆破に巻き込まれたんでしょうね。お気の毒に」

少々カチンとくる言い方だったが、俺はそれどころじゃなかった。

俺はただただ、消防士たちが火を消すのを遠くから見ていることしかできなかった。

「——ッ！そうだ、秋雨^{あきめ}は！？ちゃんと逃げたのかよ！？」

「引きこもりの弟さんなら、私が逃がしましたよ。さっき。メルで」

「・・・ハア？ お前、なんであいつのこと知ってんだ？」

七瀬はそれでも、冷静に燃え盛る俺の家を見つめる。

「一応、クラスメイトですから」

七瀬は、単調に、淡々と、そう答えた。

今日の災難、明日の寢床（後書き）

今回は思いつきで主人公の家を燃やしました。

これが今後の展開に吉とでるか蛇が出るか・・・。

まあ、何もわからないって意味です。

今更ですが、感想や誤字・脱字などあればよろしくお願いします！
！

そして俺は事実を知る

俺は寢床に困ったのでクラスで一番親しい友人、秋瀬燦汰あきせ さんたの家で泊まらせてもらうことになった。

「お前も大変だなー・・・1週間で2度もあんな目にあうなんてよー」

リビングテーブルのソファに座る俺に、真正面に座る秋瀬は言った。

「まるで何者かに狙われてるみたいですねー」

と、なぜか俺の横には秋瀬の姉、秋瀬 まどかさん

ふつうこういう時って俺の正面側に座らないか？ なんで横・・・。

秋瀬のお姉さんは物腰の柔らかい人で、長い髪の毛を後ろで縛っているところに生活感を感じる。

この人がまさか、秋瀬（燦汰のほう）と同じ両親から生まれたとは信じがたい。

対する秋瀬のほうは、騒ぐ↓怒られる↓喋り始める↓騒ぐ↓怒られる、をひたすら繰り返すような単細胞なのである。

「はは・・・。そうですね・・・。」

無理やり笑みを作り、そう答える。

「で、それはいいけどよ・・・。結局その弟はどうなったんだ？
いなくなっただんどう？」

「ああ。事件の後にはもう居なくなってた」

「見つかったらいつでも匿かくまってやるからな」

「ああ、うん。ありがとう・・・。」

俺は、差し出されたオレンジジュース（らしきもの）をグイッと飲む。しかしオレンジジュースにしては少しトロツとした舌触りがある。

「これ、なんのジュースですか？」

「見てのとおりオレンジジュースだろ？」

「お前に訊いてねえよ……。お前に訊いたんだったら敬語なんか使わん」

俺はまどかさんに訊いたつもりだった。

まどかさんはおっとりとしている。

「あの、まどかさん……。？」

まどかさんは、おっとりとしている。

「まどかさん……。聞いてますか？」

まどかさんは、おっとりとし（以下略

「姉貴。聞いてるか？」

秋瀬はまどかさんの肩を軽く揺さぶる。

「ん？あら、ごめんなさい。なんの話をしてたんだっけ？」

「いや、これ、何のジュースですかーって……。？」

「あら、美味しくなかったですか？」

「いや、おいしかったです。はい」

「そのオレンジジュースは隠し味にハチミツとハチノコとプロテインをいれたんですよ」

「なるほど、どおりでドロツとザラつとして……。プロテイン！？」

なんで客人に出すジュースにプロテインが！？

俺にどうなって欲しいんだ！？

「あ……。あの……。なぜプロテインが……。？」

「え？男の子ってみんなプロテイン好きじゃないの？」

「あつ、姉貴！俺と他の奴を一緒にしないでくれ！！」

「お前日常的にプロテインを摂取してたの！？」

「へへっ。昔の話だ……。？」

照れくさそうに言うな。てかお前そんなに筋肉ないだろ。

「お前、プロテイン飲んだからって筋肉ムキムキになるわけじゃないぞ」

「そ、そうなのっ！？」

予想通り、案の定の反応だ。

にしても、変な家族だよ。コイツら。こんな綺麗な姉だけでも分けて欲しい。

「そういや、まどかさんってもう大学生ですよ？なんでここに？」

俺たちが高校3年だから、その姉はもう大学生のはずだ。

ひよつとすればもう社会人に出ているのかもしれないが、まどかさんはかなり若く見える。

むしろ高校生にすら見える。

「ちよつとこちらに用事があつて・・・それで」

「そつすか・・・」

特に気になつたわけでもないが、なんとなく質問しただけだった。なんか気まずいな・・・。

こんな仲のいい姉弟の中に混じるなんて・・・。

誰かこの空気をかき乱してくれー！！

ピンポーン

チャイムの音がした。

音の近さからして、この家だ。

「誰でしょう・・・？」

まどかさんが部屋から出ていき、見事に募っていた緊張感から開放される。

た、助かった・・・。

「お前のねーちゃん、美人だな・・・」

「あー、昔からモテたもんな・・・」

「まどかさんて、うちの高校だったっけ？」

「そうだぜ」

秋瀬とは高3になってから知り合ったので、姉のことは知らない。秋瀬自身の口からも聞いたことはなかった。

しばらくすると、玄関の方からパタパタとスリッパの音が近づく。
リビングの扉が開くと、顔をだしたのはまどかさん。
当然か……。

「誰だったのねーちゃん？」

「女の子。水城君に用事だって」

お、俺？

「なんだろな……ハハ……」

大方、月島か七瀬あたりだと思うが……。

的中。

ドアの前にいたのは、月島だった。

「何の用だよ……」

月島の顔はいささか不機嫌そうだ。

「いや、昨日さ、私ん家から帰るとき、なんかした？」

「あ？ いやなんも……。どうしたんだ……。？」

そうだ、確か帰りに七瀬がイタズラしたと言ってたような……。

「家のブレーカーが……、全部落ちてた……。」「

……。

「……。陰湿な嫌がらせだなー……」

「部屋に戻ったら電気が消えててさー、で、そんなに電気使って
なかったからブレーカーでもないかなーと思って見てみたら、案の
定ブレーカーだったよ……」

「大変だな……」

「で、水城の家に行ってみたら……、なんか焼け焦げてたしさ
ー……。おまけに七瀬の家はわかんないしさー、とにかく大変
だったわけよ」

……。

「なんつーか、災難だな・・・」

「てわけで七瀬に会ったら叱っておいてくれよー」

俺はあいつの保護者かよ。

「わかったよ・・・」

「じゃ、用はそれだけだから」

月島はおとなしく帰った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。なんだっただよ・・・・・・・・一体・・・」

ドアがゆっくりと締まるのを見届けると、俺はリビングに戻――

ピンポーン

――
れなかった。

「今度はなんだよッ・・・・・・・・!!」

他人の家だということもすっかり忘れ、ドアをガチャリと開ける。

「こんにちは水城御鷹先輩」

そこに立っていたのは、七瀬だった。

「何の用だ・・・・・・・・?」

「昨日、月島先輩の家のブレーカーを全部落とした件について謝罪しようと思ったので、月島先輩に会ったら謝っておいてください」

「なんでお前ら俺に押し付けようとするんだよ!! 七瀬は月島の家知ってるだろうが!!」

「ワカリマセーン（棒読み）」

クソッ。『かつこぼうよみ』まで律儀に読みやがって・・・・・・・・。

「・・・・・・・・。冗談ですよ・・・・・・・・。今日は別の用事で来たんです」

「・・・・・・・・なんだよ?」

「なんと――、」

七瀬は無駄に余韻をあける。

「犯人を特定しました」

「ボケてる場合じゃなかったよね！？そっちが大本命だよ！！」
なんか驚く場所が違う気もするが……、まあいつか！
「で、誰なんだよ……その犯人つてのは……！」

「先輩のよく知ってる人物ですよ……」

……？

よく知ってる人物、と言われてもパツと浮かばない。

「で！？誰なんだよ！！??」

「……それはあえて焦らします。まずは犯人の超能力についてです」

焦らしやがった！？

焦らしやがったよコイツ！！

「超能力とかもうぶつちやけどうでもいいよ！犯人教える！！」

「どんな名探偵だって、犯人より先に犯行方法について先に語るでしょ？」

名探偵気取りだよコイツ！！

「犯人の能力は——、『人工的な明かりを爆発させる能力』です」

「……超能力ってそんな大雑把なもんでいいのかよ……」

「だから犯人は大きな施設を集中的に狙った」

俺の率直な疑問を華麗にスルーしやがった七瀬は、名推理を披露し始めた。

「しかしその中には例外が二つありました。それがなんだか分かります？」

「1つは……、俺の家だよな……？」

「正解です。そしてもう一つが、月島先輩の家なんですよ」

何言っただよコイツ……。意味わからん。

「……ッ？はあ？爆破されてないじゃないか……」

「そうですよ。されませんでした。私がブレーカーを全部落としたことによって、ね」

なるほど……。それならブレーカー事件と犯人の超能力にも辻褄があうな……。

「その“例外”の共通点。それは――」

「……。俺がいた場所、つてわけか……。」

「正解です」

七瀬はおどけたように、手を鉄砲の形にして俺を撃つジェスチャーをした。

「……。でもよ、それだとこの家も爆破されておかしくなんじゃないか？」

「ええ……。犯人も、自分のアジトは壊したくないでしょうね」

自分の……。アジト？

自分の家ってことか？

「え……。それってつまり、犯人は……。」

「その通りです。犯人は、先程からあなたの後ろにいる、秋瀬先輩ですよ」

え……？

後ろ……。？

後ろを振り返る。

全身にゾクツと悪寒が走る。

そこには、気持ち悪い笑みを浮かべた――、秋瀬 燦汰がいた。

そして俺は事実を知る（後書き）

意外性を追求しました。
ただそれだけです！！

愛理の素顔

ジジ、ジ．．．．．ジ．．．．．

玄関の蛍光灯がパチパチと点滅する。

まずいッ！

逃げようと家の外に体を捻る。

しかし、段差のせいでバランスを崩した．．．！

ヤバッ．．．死ッ――

ぐいつ。

全身の重力が狂ったように、引つ張られた。

「ぐえっ．．．．．」

そんな間抜けな声を上げながら俺の全身は家の外へ放り出される。

その瞬間

ドオン！！！！

玄関口が真つ赤に染まり、熱が露出した肌を覆う。季節のおかげもあってか、肌の露出は少ない。

煙が晴れ、家の中が見渡せるようになると、秋瀬は軽い舌打ちをかました。

まるで――、俺が死ねばよかったと言わんばかりに――。

俺は秋瀬のその表情に、リアルな恐怖心と激昂感が込み上げる。信じてたのに！！

友達だって．．．、裏切らないって．．．信じてたのに！

「ダメだよなア．．．水城オ？人間てさ、妙な力を持つちまうと妙にそれを使いたくなっちゃう。まるでお年玉をもらったガキみてえによオ．．．」

秋瀬はフラフラとこっちに向かって歩いてくる。

「それは制御しきれないあなたの責任です。あなたはその超能力ちからに溺れ、無闇に足掻いているだけです」

凜々しく説教した七瀬は、向かってくる秋瀬に動じず、ただ見据える。

「七瀬、ここは逃げたほうが・・・」

「彼の能力は室外ではただの飾りです」

それもそうだった。

えと・・・、『人工的な明かりを爆破させる能力』だっけか？

人工的な明かりは昼間の室外にはほとんどない。あいつの能力は室外では無意味なのだ。

「ハハッ・・・じゃあ余裕だなッ」

「いや、案外そうでもないんですよ・・・」

「!？」

よく見ると、秋瀬の手には包丁たるものがしっかりと握られていた。

「なアにコソコソしてんだよオ・・・。逃げなくていいのかア・・・？」

「SHIFT-1如きに遅れをとる私ではありませんので」

キッパリと。キッパリと宣言した。

自信満々だなー・・・。

「先輩は逃げてください。邪魔になるので」

自力で立ち上がる俺に対して、七瀬は辛辣な言葉を浴びせる。

「邪魔って・・・、そんな言い方ッ——」

ヒュン

秋瀬は包丁を横に薙^ないだ。

標的は七瀬だ。

驚いたことに七瀬は、不意打ちにも近い一撃をあつさりとかわしてしまったのだ。

あつさりと。眉一つ動かさず。

「チッ・・・!!」

秋瀬はその七瀬の行動を偶然であると断定し、包丁を手前に引き、次は突く。

俺の脳内では、七瀬が避ける、という考えしかなかった。

七瀬にはそれをするだけのスキルがある。

どっという原理かは知らないが、七瀬にはその速度の世界が許されている。

俺の予想は、完全に外された。

ブチッ

何かが千切れた。

それが、秋瀬の腕である事は誰がどう見ても一目瞭然。

俺の目の前には、秋瀬の右手が包丁ごとゴロリと落ちた。

「……ッ?!ぐッ……、ンだよこれエ!?!」

秋瀬は今までに見たことがない、“自分の腕が無い”状況に戸惑うばかりで、反撃の手を打とうとはしなかった。

「これで力の差がお分かりですか?」

七瀬は一切動いていない。

凶器を持った相手に対して、一切の同様を見せず、ノーモーションで反撃してみた。

それが力の差。その力はあまりにも圧倒的。

「俺の……俺の腕がッ……!う、ぐ、あアアあああああああああああああ!」

ぐちゃり、と。生々しい音がした。

「ガボッ、ゲホッゴ……ぐ……」

秋瀬は何の前触れも無く吐血した。

さっきの音からして、舌を噛みきったのだろう。

でも、なんで?

30秒ほどすると、秋瀬は息絶え、無様に地面に転がった。

七瀬は返り血を一切浴びていなかった。

でも、どうやって秋瀬の腕を切断したんだろう……。

その切断方法が、“今までこの世界にあつた技術”ではないことは確かだ。

「水城ツ！一体どうし……て、ええ！？ナニコレ?!」

「っ……あ、月島……」

爆破騒動に駆けつけた月島は、この状況を見て驚愕した。

「……秋瀬？なんで秋瀬……が……」

説明なんて出来る訳がない。当事者の俺ですらこの状況を掴みきれてないんだから……。

「あれ？月島先輩……、いたんですか？」

こちらを振り返る七瀬の表情は、とても魅力的……とは言いがたい、まるで小悪魔のような冷笑だった。

「フフ……。水城御鷹先輩、月島先輩。それでは引き続き真犯人の特定でも始めましょうか」

は……？

今なんて？

「真犯人って……秋瀬じゃなかったのか？」

「ええ。秋瀬さんは真犯人の能力で操られていました。だから舌を嚙んだんですよ。戦えない下部に意味はありません」

……

目の前で人が死んでるっていうのにッ……、なんで淡々と喋り続けることができるんだよ……。

「お前……、死んだ人間が怖くないのか……」

「いいや、怖いですよ。でも怖がつている暇はないんですよ……

・そんなことより、何かおかしいと思いませんか？」

「な、何が……？」

「たしか秋瀬先輩って、お姉さんがいますよね。それも家の中に……」

なんでコイツが知ってるんだよ……。

「名探偵さんはなんでもお見通しだな……」

「それほどでも……」

・・・。

「で？そのお姉さんがなんだって言うんだよ・・・？」

「まだ気づかないんですか？これだけ騒ぎが起きてるのに」

「あ・・・、」

そうだ。

こんなに騒ぎが起きているのに、まどかさんはちつとも来ない。

それどころか騒ぎもしない。

「なんででしょうねー。それは、お姉さんが真犯人だから・・・？」

愛理の素顔（後書き）

もうすぐ1章完結です。

感想など頂ければ幸いです。

ある一つの決着

どういう事だよ……。

まどかさんが超能力者で……、弟を使って犯罪を犯した……。
・？

「お、おい七」――

「ご明答よ？」

急な後ろからの声に、背筋がゾクツとする。

振り返るまでもない。

これは、秋瀬まどか本人の声だ。

振り返るとそこには、顔の上半分を覆い隠す灰色の仮面を付けた秋瀬まどかと、そしてもう1人の男が立っていた。

「クス……、頭がいいのねお嬢さん。お姉さん尊敬しちゃうわあ……。」

「一連の事件の真犯人ですね。秋瀬まどかさん」

七瀬は別段うれしそうでも悲しそうでもない顔で、名探偵さながらのセリフを吐いた。

まどかは仮面を外し、素顔を見せる。それは紛れもなく秋瀬まどかの顔だ。

「そうよ……。私が、ね。まあ私の能力自体大したものじゃないから、弟の能力を借りたんだけどね」

なんて……。最低の人間。

この人を1秒でもいい人だと思った自分が恥ずかしい。

まどかは静かにまた仮面を付け直す。

「この人、秋瀬のお姉さんなの？」

月島が小さく俺に耳打ちする。

「ああ、そうだ……。」

「妹がいるとは聞いてたけど……」

「妹もいるのか……」

正直、今居ない秋瀬妹のことなんて興味がない。

「それでは、あなたを拘束させていただきますが、よろしいでしょうか？」

「嫌だ。……って言ったら？」

「……、同じ結果です」

「怖い」そんな正確だとモテないわよ……？」

「余計なお世話ですっ」

両者譲る気はないらしい。

この前の七瀬と月島を思い出すな……。

2人の会話を心配そうに見つめる俺と月島。

いや、心配なのはそっちじゃない。

まどかの後ろ、仮面をつけた男だ。

髪は真っ白く、この場面で唯一常軌を逸している。まあ、2人が付けた仮面も十分だが。

しかし微動だにせず、ただそこに存在しているだけの郵便ポスト並の存在感しか放っていない。

明らかに怪しい。

「まア、こつちも安安と捕まる訳にも行かないのよねエ……。
アハッ」

まどかは、ニヤけた面で俺（仮面をつけているので曖昧）を見た。

ぐしゃッ

なんだ？

どうもさつきからみんなが俺に注目している。

七瀬と月島は驚愕し、まどかはニヤニヤと俺を見つめる。

あの白髪野郎は？
いない。

俺の体は無意識的に、地面に吸い寄せられる。
さつきから何かがおかしい。

背中がじんわりと熱い。
意識が遠のく。

体が地面にねじ伏せられてから、ようやく悟る。

俺は白髪仮面野郎に、背中を刺された。

長剣で、ブスリと。

背中からドクドクと血が湧き出る。

視界が揺らぐ。

背中に亀裂が走ったかのように痛みだした。

死に対する恐怖心すら感じた。

まだ死にたくない。まだ死ぬには早い筈だ。

いやだいやだ嫌だいやだいやだ嫌だ嫌だッ嫌だいやだ嫌だいやだ嫌だ嫌だいやだ嫌だ嫌だアッ！！！！

その願いは決して叶わず。

俺は土の感触すら感じなくなった。

そして意識は出ることのできない深い深い海の底へ…………。

さあ、もう準備はできた。

いつでも出発は可能だ。

覚悟はある。

自信だって、ある。

もうこんなのは懲りごりだってんだ。

行こうぜ、俺。

行こうぜ、みずしろ しゅう水城秋雨ッ！！

ある一つの決着（後書き）

主人公を後ろから刺してみました。

でもこれでお話は終わりじゃないですよ！

ここからは元主人公、御鷹の弟である秋雨のお話です。
感想などくださいますようお願い申し上げます。

少女と部屋

「目標の水城御鷹を連れて参りました・・・」

そこは、お姫様が住んでいるようなメルヘンチックな部屋だった。すでに息の絶えかけた御鷹を抱え、白髪はくはつの仮面男が言う。

男と見つめる先にはお姫様ベッドに座る、1人の少女がいた。

「ご苦労ね・・・って、背中からブスリじゃない・・・」

「生死は問わない」と申し遣っていたもので

言葉の綾より、と少女はイジけた風に男に近寄り、御鷹の顔をしげしげと見つめた。

「何よ・・・まだ死んでないじゃない」

「急所は外しましたので」

日本ではまだ殺人が犯罪だというのに、この男はあっさりと御鷹を殺そうとした。

厳密には殺していないのだが、十分な殺人未遂である。

「コレはどうしますか？」

「・・・運んどいて。研究室よ」

「かしこまりました。お姫様」

男はフツと笑うと、抱えた御鷹ごとどこかへ消えた。

少女の年齢はもう、17歳。

“姫様”と呼ばれるにはもう年齢が釣り合わない。

本人はやめるといつも言っているが、あの男はいつまで経ってもそれをやめようとはしない。

「まったく、性格の掴めない男ね——」

そう言って少女は、地面に転がったナニかを軽く蹴飛ばした。

「この部屋、暗いわね・・・」

明かりの付いていない部屋が明るいわけもなく、ヤレヤレと少女は立ち上がる。

地面にゴロゴロと転がったものを払いのけながら、部屋の電気ス

イッチまで歩いた。

電気を付けると、突然の眩しさに少女は目を背ける。

「ったく・・・こんなこと私にさせないでよね・・・」

しばらくしてシャンデリアの光に慣れ、まばたきを3回ほどすると、少女は目を開けた。

——部屋の床には、ゴロゴロと人間の死体が転がっていた。

部屋の壁は返り血塗れ。

そこにはメルヘンなど一切残らず、残ったのは蓄積された恐怖と少女の姿だけだった。

「はあ・・・処分が面倒ね・・・」

——第1章：完結——

少女と部屋（後書き）

第1章が完結いたしました。

全部で10章くらいになると思います・・・。
長いな・・・。

第1章登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

第1章登場人物紹介

第1章：登場人物紹介

水城 御鷹 （みずしろ：みたか）

一般戦闘力：30（最高は100）
特殊戦闘力：0（最高は100）

主人公。というか、元主人公。
何か特殊なスキルがあるわけでもなく、いたって平凡な男子高校生。
中学生の頃に少し剣道をかじったので、基本的な戦闘能力はあ

る。

趣味も特技もコレといってナシ。
見ていておもしろくもない人間だ。

水城 秋雨 （みずしろ：しゅう）

一般戦闘力：???
特殊戦闘力：????

第2章からの主人公。

第1章では大して目立たなかったが、御鷹の弟である。
現在中学3年生。

趣味は筋トレ、特技は武道ならなんでも。

七瀬 愛理 （ななせ：あいり）

一般戦闘力：80

特殊戦闘力：999（測定不能）（SHIFT-?）

秋雨のクラスメイト。

金髪のおさげ。

戦闘能力においては、回避、防御能力に特化している。
未だに謎多き存在である。

学力においてもとても優秀。

月島 夜見 (つきしま：よみ)

一般戦闘力：18

特殊戦闘力：11 (SHIFT-1)

所有する超能力は『何もない空間から物体を取り出す能力（今までに見て触ったことのあるもののみ有効）』

未だに超能力について詳しく知らないが、使い方だけは知っている。

「くくかよー」や、「くくだろー」など、語尾を伸ばすクセがある。

身長は御鷹と比べてかなり低い。

クラスメートの榊雛姫の親友である。

榊 雛姫 (さかき：ひなき)

一般戦闘力：5

特殊戦闘力：0 (おそろく)

御鷹の幼馴染でクラスメート。

同じくクラスメートの月島夜見の親友である。

基本的に頭は悪く、成績はクラスで最下位レベル。

後半はほとんど空気だが、果たしてまだ出番はあるのか・・・？

秋瀬 燦汰 （あきせ：さんた）

一般戦闘力：20

特殊戦闘力：15（SHIFT-1）

『人工的な明かりを爆破させる能力』を所持している。

超能力者としてはかなり弱い部類だが、使い方によっては強い。
その『強い』に至る前に死亡した。

ちなみに、能力をうまく活用するためには、懐中電灯を大量に
持ち歩けばよかった。

秋瀬 まどか (あきせ：まどか)

一般戦闘力：40

特殊戦闘力：80 (SHIFT-3)

物腰のやわらかい秋瀬燦汰の姉。
と思いきや、とてつもないDS。
弟の燦汰を使つて犯罪を犯し続けた。
なぜ途中から仮面を被ったかは不明。

秋瀬 凛々 (あきせ：りり)

一般戦闘力：???

特殊戦闘力：???

秋瀬燦汰、秋瀬まどかの妹。
まだ存在しか出てきていない。

白髪の子 （はくはつのおとこ）

一般戦闘力：？？？

特殊戦闘力：？？？

見た感じの年齢は高校1年生くらい。
年齢に似合わず白髪である。

なぜ仮面を付けていたかは不明。

御鷹を殺そうとした張本人である。

それ以外の情報は一切不明。

少女 (しょうじょ)

一般戦闘力：???

特殊戦闘力：???

詳細は一切不明。

水城 春子 (みずしろ・はるこ)

一般戦闘力：40

特殊戦闘力：0 (おそらく)

御鷹と秋雨の母。

今後出番は無いと思われる。

水城 武雅 (みずしろ：たけまさ)

一般戦闘力：89

特殊戦闘力：0（おそらく）

御鷹と秋雨の父。

物語開始時からすでに死んでいる。

剣道においては七段取得者。

八段を取る前に死んでしまったので、腕はかなりいい。

のりちゃん先生 (のりちゃん先生)

一般戦闘力：38

特殊戦闘力：0（おそらく）

光星学園高等部、三年E組の担任の教師。
担当はこう見えて家庭科。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2758z/>

UNKNOWN BLADE

2011年12月24日14時47分発行